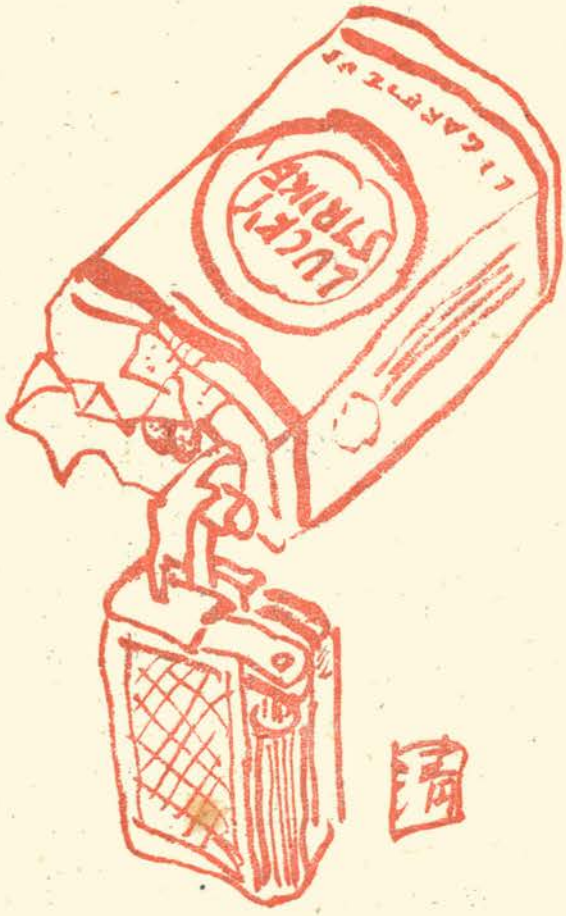
川柳の雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎☆主宰

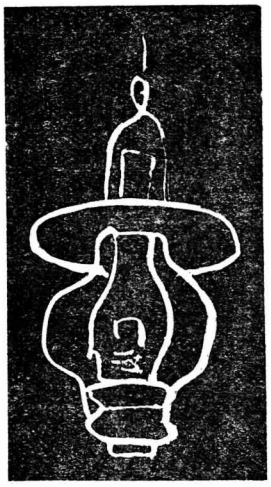


昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿四年十一月一日發行第四卷第十號
（毎月一回一日發行）創刊大正十三年・通卷二百七十号

No.270

NOV. 1949

文化の日



十一月三日と云へば明治天皇の誕生日で、明治の空氣を呼吸した人達にとつては忘れることの出來ない懷しい日である。明治の天長節はいつも爽やかな菊日和で決して雨が降らないし、心からお祝いの出來る日だつた。明治天皇がおかくれになつても、永らく親しんで來たこの日を忘れることが出來ないので、この日を何等かの形で遺しておきたいと云う氣持ちから、明治節として祝祭日の一つに數えたのである。

敗戰後、日本は文化國家を目指して、再興することを世界に宣言した。

そして祭日に、「文化の日」が生れ、十一月三日が、それにあてられた。それは全く因由のないことではない。十一月三日は明治以來、私たちにとつて、忘れ難い日であるからである。

しかし、十一月三日が、親しみのある日だから、「文化の日」として遺したと云うだけでは意味が稀薄である。「文化の日」が出來た以上、それを有意義なものとしなければならぬ。そして從來の十一月三日以上の十一月三日にしなければならぬ。

ところが、今の日本はそうした実践力がまことに稀薄である。防火デーに、平日以上の大火をやつて啞然とさせる現狀ではまことに心細い話である。私たちはこの日を期して、文化國家としての一歩前進を約束しなければならない。先づ政治の貧困さを打破しなければならない。口に文化國家を称へていながら、文化國家を建設するための施設に対して何一つプラスするのでないとしたらどうであろうか。プラスどころか、從來の施設に対してさえ、予算がないの一言でマイナスにされている現狀ではないか。

こんなことを考えて來ると、「文化の日」は單なるお祭騒ぎとして看過してはならない。私たちにとつて「文化の日」は嚴しい反省の日でなければならないと思う。

過去に於ける文化功労者に対してこの日を期して文化勲章を贈ることものぞましいことには違いないが、それよりも將來の日本文化へ戰をいどむ人達への物心両面の應援は、もつともつと、のぞましいことではあるまいか。曾ての陸海軍費が、そつくりそのまま文化面へ振り向けられてこそ文化國家の名をはづかしめないものが出來上るのではないかと思つている。「文化の日」を前にして、当局に深思三省をのぞむ。（路　郎）

男女両性に作用する
プレホルモン
塩野義製藥　皮下注射・錠劑
SHIONOGI

市阪大　祭化文柳川
ブラク曜水丸大　於　午正日三十月一十
郎路生麻・府水本岸・北南滿食・人塊口堀　演講

川柳塔

麻生路郎

女またお皿の上に眼を伏せた
平凡な幸福牛肉を百〆買ひ
からみつく後家の談の秋の夜や
ライバルだつた婦長がつらく当る筈

○

兵庫縣　奥村丹路

商客と座し身につかぬ酒さかな
復興する堺筋にて
人徒らに多く柳はまだちさし
あきらめのなかに夫婦の築く日々
木石にあらずと日記したゝめし
妻の足とめたは電機洗濯機

大阪市　浪玲之介

キャバレーの体臭私はアルバイト
地上権カンナは知らず匂ふなり
病床月余
人生は引算と知る長病
子の不正父暴逆に似た怒り

奈良縣　上田翠光

我れ農夫牛の歩みにまかせたり
眼の下の谷の深さに晝の霧
張切つた若さを世故にゆがめられ
年寄りがチトなまくらになれと云ふ
借金はありそうもない趣味をみ
情熱は其の人柄に包まれて
涙もろさが言葉の端をきつうする
ものみんな美し君を得てしより
仲の良さもたれ合ふてる終電車
誰もみてへんとは女醉うてゐる

鳥取市　大西八歩

松江大火
水郷の水大火事へ間に合はず
金策へあはれ個性も忘れはて
葬会所で見直されてる作業服
老らくの恋雨の日は御茶を点て
五分五分に飲んで飲ました様に云ひ
都心遠く言葉をかざる要もなく
食ひのばすつもりへ飯がくさつてゐ
二十人前あれば事足る人生か

池田市　戸田古方

清貧をうぬぼれている甲斐性なし
大の字にごろりとうちの疊なり
只今の趣味は独りでさす將棋
末つ子を笑わす程に醉つてくる
勤行をもつと早ようとせかされる
金詰りの話は隣まですせまり

布哇　内藤草一郎

お互にすつからかんで打ち解ける
他人ではない献酬へ女將てれ
あれあんな事をおつしやる舞扇
あぶないわそんなに呑ませてどうする氣
雑婚が悲劇に終る氣の毒さ
月賦丈け稼ぎ切れないミシンふみ
あんまりの美男に母の氣が迷ひ
やけ酒とやけ酒いつか握手する
ドツクスト見返り物資の影もなし
差し向ひお前もしわが殖へたなあ
東京へ出て刺青の多いこと
我が道を行くパン助を羨む日
美人床下手は承知で通はされ
格安の家賃幽霊保証せず
当選の鐘にはにかむワンピース

東京都　川村好郎

夜の汽車ラムネの罎のころぶ音
プライドがあるわと女給ぬかしたり
子供等が待つてゐますと妻の文
アイロンへ力が入つてゆく嫉妬
欠勤が有樂町の角に立ち
残業と聞いて笑顔に変る妻

岡山縣　浜田久米雄

男一匹辞令に抗すべくもなし
不惑今日儲ける夢で寢るとする
在職の長さは意志を曲げて経ち
嘘の世を二た道かけて曲り行く
さてどれを先にするかはボスが決め
引揚げの手を振り首を振り通過

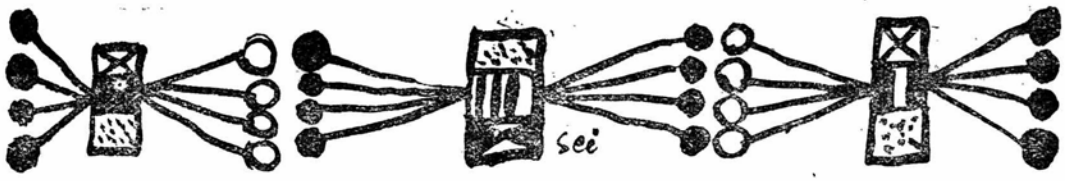
大牟田市　高田抱逸

みあひする間と指輪借りて來る
盆踊ダンスの癖が出て困り

大阪市　市場沒食子

東京都　宮田不二

東京都にて
東京で大阪弁がちと腐り
柳友　玄水君に会ふ
赤門でオイと雅号で名を呼ばれ
日光にて
陽明門僕でもくさすとこがなし
中禪寺湖にて
惠まれた天氣を茶店ほめてくれ
ひとり來てあつけなく見る中禪寺
華厳の滝にて



滝下へひとり切りなるエレベーター　江ノ島にて　大阪市　須崎豆秋

渡橋料修繕費かや金五円　鎌倉にて　大阪市　正本水客

美男にておはす大佛へも詣り

明月を見てると猫も來て座り

ほの〳〵と夜明け家鴨のオルガンで　別邸は夜通し犬に吠えさして

煌々とすしがぎようさん賣れ残り

盆踊りタンスの鍵を落して來　大阪市　竹内潮花

屋上へ出て停年の風にふれ

洗濯物とお菓子を持つて逢いにくる

子のために父の名前を云わじとす

男を独占するために死をえらぶ

生みの親育ての親と云う芝居

裏切つたことの弁護にくたびれる

最後までうたがうことを知らず逝き

父親と積木で遊ぶ不仕合せ　神戸市　北川春巣

汗拭いてふいて身の上話する

君へ書く便りペンなと変へませう

人間にあらず神にもあらず死に

サイコロの様にここでも捨てられて　大阪市　赤ん坊を抱く喫いさしは耳にあり

さよならへエンジンドアが二度も開き

千人針が立つてた辻に宝くじ

母病氣墓参に帰れと云う如し

ほゝゑみの魅力を女知りはじめ

繃帯を飾りのように卷く若さ

盆踊り暗い所から輪に入り

盆踊り我が子の手ぶりあなどれず　奈良縣　尾崎方正

物價高カンカン帽子見ずに秋

耐乏へ好む好まぬノーハット

破れ靴へ千円札が出ると云ふ

何する人ぞ鞄の艶のてか〳〵と

夏や去る夕立ごとに草繁し　姫路市　夷一笑

モロッコ守備隊を見て

討伐の命に私情をさしはさみ

男次々に死んでゆくのは勝手なり　大阪市　木下幽王

地球は廻る病人が居て医者が居て

ぞつとする声でぞつとする歌唄ふ

ちびた下駄はけば身に染む秋の風　鳥取市　中島鉄洲

猫を飼ふ

猫呉れてからの様子を見舞はれる

吾寢所犯せる猫に苦笑する

猫の怠惰に吾を慮えり

猫の温味膝に残りて嫉妬あり　大阪市　橋本美奈子

いゝのどをした娘会社止めちまい

油虫はころしこうろぎそのまゝに　大阪市　水谷竹荘

金融の返事考へときまつさ

眞夜中のミシン健氣な未亡人

失恋をさせたと知らず式を挙げ

一幕を残して帰る共白髪

衣料切符使へぬ暮し妻のぐち

満員車きれいな娘にはさまれて　八代市　佐野卜占

辞職してます大空へ背のびをし

條件はどうあらうとも勤める氣

断りの云へぬ名刺を差出され　下関市　國弘半休

記念祭などと町内儲ける氣

稲の花二百十日をよけて咲け　兵庫縣　小沢史葉

藝者から二号それから世帯じみ

千円の札が出るのに金づまり

糸たれて退院の日の氣の長さ　兵庫縣　小西無鬼

ラッシュアワー洋傘の柄につゝかれる

急用を女の列に阻ばまれる

乘り降りへダンスの型で裾を上げ

氷嚢の様な乳房の揺れるバス

貸文庫誰が閉ぢたか蚊の栖

窮すれば通じ通じりや又窮し　新居浜市　在間小楼

月の夜を月にさからふごと歩き

もう秋を知らす虫ある淋しさよ

其の昔好きな女と出合ふ海　吹田市　野本呑水

金権に嫁して若き寡婦たらん

掏られたはむづかる小供のせいにして

流しあふ相手の背の巾廣き　布施市　糸本醉月

鳴くセミにしばし童心呼び戻どし

信心が盛夏を山へ登ぼらせる

陽焼け止めのクリーム塗つて海にゆき　奈良縣　白牛奇朗

男の兒の方へは鳩は寄りつかず

和服着て秋を歩いてみたくなり

弁当箱日日山門を潜る幸

お隣の豚にいら〳〵する眞晝　岡山縣　山分淑郎

すねた夜の宵待草はちぎられて

子の日記こま〳〵書いてあり淋し

新聞に死の眩惑を教へられ
母と來て他人行儀な瞳で答へ
今言つた嘘をとり消す嘘をつき
姐に母の家風がまだのこり
戰友を尋ね尋ねて職探し
継母が來てから辿る道でした

高知市　月原宵明

親子程違ふ役人に叱られる
恐ろしいことしでかした子の無口
よそ者へしつこくまとふ靴磨き
外食券族は淋しいものと知る
外食券みなうつむいて喰べてゐる
外食券族の鞄の置きどころ

東京都　山根白星

恋人のとつても好きな公衆電話
子が登校してから家を賣る話
再婚を父は考へとくとだけ
儲けてるくせに算盤置いて見せ
相宿の襖は夏の風を堰き
磨かせる俺を尻目の稼ぎ高

山口縣　長野井蛙

轉勤の行李一つは玩具なり
四十の恋へ親族会議とか
どうしても十迄教へさすつもり
避姙藥宿の女中に教へられ
片思ひ弟を褒め姉を褒め

呉市　林野甦光

お互に馬鹿だと仲の良い夫婦
萩すゝき活けて月の出へ座り
参道を仲よし同志手をつなぎ

京都府　間嶋青丹子

人混みの中に見つけたベレー帽
御見合を軽蔑してる娘に育ち
二号置く父を娘はきたながり
お悔みへ咥え煙草のふと慌て
どみ〳〵した職場へ愛着捨てがたく

大阪市　上田春柳

妻の父の死を悼む

ねむためにお通夜の客も膳につき
秋風にならぶおしめがゆらゆら

布施市　森下愛論

懐疑なく妻は子と居て希望あり
嘘のない生活がほしい子と居れば
三十の父で茶目氣がまだ抜けず
薄給の我家詩もあり月も照り
父一人子一人パンですましとき

大阪市　太田良子

物言へば言うて損する人であり
二人して飲めど妻には用があり
サンマタイム最後の夜だ散歩しよ
茄子の出來一まず見せて母は切り

尼崎市　靜岡忠八

仲人に事の起りが馬鹿らしく
病名を言わぬがさびし日向ぼこ
泊り客僕は書物の枕なり
食糧に早や氣をまわす泊り客

岡山縣　丸山弓削平

万年筆恋を綴つて疲れない
革命の大望汽車を轉がした
半ズボン見本とボールペンを出し
頑くなゝ父に養はれてゐます
結局は夫が負ける平和です
保險屋の話を消して踏むミシン

実家に來実家の金で入歯をし

岡山縣　直原七面山

邪恋かわ知らぬがそこに生きる道
裸体画の乳房私のにより似てる
泥酔え妻諦めの床につき
含み声出す娘の体熱れてをり
肉体に自信持つ脚投げ出され
恋をしませう恋をしませう目が搦み
ぶしつけなお尻を俺の膝に乘せ
夏やせを願つて娘なお太り
残り物あさつて女房豚に似る
あの娘をも亦此の娘をも愛してみ
生貞面目な顔で小娘挑んでき
湯上りの素肌夫の目を避けず
ねらはれているよ小鳩の様な娘が

宇部市　上林粗影

三男は腺病質野坂を迎へたし
キリギリスヤハリ男の子を嫌ひ
籠の虫自由主義者とは知らざりき
白粉の匂ひに負けたニヒリスト
たち寄れば母の声する花芒

姫路市　狩野燕子

モロッコ守備隊を見て

逃げた妻友のワイフでめぐりあひ
女には友情なんかもろいもの
名を変へたゞけでは過去は消えぬもの

○

松山市　前田伍健

アルバイト声の嗄れたも型に成り
哲理ではなどゝ息子の薄いひげ
チエンジのひまアナウンサー雲をほめ
口笛はさびし一山すゝき風
よく〳〵と見え税務署え師匠來る

句評

東西南北

東京　山根白星
横浜　福田山雨楼
大阪　大西野介
神戸　大鶴喜由

養老院ララの外套スマートね

二・三月号川柳塔より　山雨楼

白星＝此の止めの「ね」がペニシリン程に效いている。「ね」の咏嘆敍法は川柳には珍らしい。然り「川柳雜誌」以外のマンネリズムの、小さな殼に閉ぢこもりたがる柳法であつたら恐らく沒句であつたろう。これは養老院と云う淋しい運命の住居に住まう老人達に対する輕蔑ではない。揶揄でもない。單なる憐憫とも同情とも違う。慈善鍋に遠くから投げ込む人達にも、多少のこれに似た感情は持つているだろうからだ。作者自身その老人達の嬉しさを自身の胸に感じ老人達の喜びの動悸を自身の心臓に感じている。作者のホッホッと暖まる樣なひととなりが感じられるではないか？心憎い羨望に似たものを感じさへしている。作者のつつましいヒューマニズムが感じられるではないか？　たとへ字足らずになるからのつけ足しの偶然の「ね」であつたとしても、素晴しい偶然の「ね」ではあるまいか。

喜由＝これは養老院の廊下で見た一スケッチに過ぎない。背骨の曲り加減、洟水を時折り垂らし、しかも素足で頭髪、髭の手入れもおつくうな老人が外套の溫さと有難さにむせび泣いている。姿体と着衣の調和でスマートが成立つとしたら、輕蔑でない皮肉つたスマートを句にしたと思う。かくしやくたる老人以外に老人へのスマートの文字は無理ではなかろうか。「ね」は嗚呼、おおなどの感嘆詞めいた意味をもつており「ね」に換えるに「よ」「だ」を考えられるがやつぱり「ね」でなければならない。

野介＝「養老院」の持つ陰惨な語感と「ララの外套」と云う現代的の明るい外貌を持ち乍ら、しかも他よりのお慈悲で頂戴したという複雜な明暗を持つた語感とを組合せ、最後に「スマートね」と明るく逃げている從つてこの下五の「スマートね」は複雜な內容を持つ明るさで、養老院居住者に対する作家の愛がにじみ出ている。凡手の作ではないと思う。ぼくはララの外套を通じて、日本の現実を反省させられた。日本の現実は養老院からどれだけの距離があるか？

山雨樓＝僕はラジオの社会の窓からこの句を得たので、実感ではなかつた。僕の心象にスマートと感じたのは、軽いユーモアと暖い人情とがゆくりなくも交叉したからである。

汽車賃をいうて農家へ近づかず

八月号川柳塔から　路郎

喜由＝後進を導くに適した秀句の点もあり、特に師の川柳を俎上にあげた。それは川柳は常に時代をよむことと、川柳の生命たる鋭さを読む点に合致したからです。食糧に悩む時代から遠ざかりかけた今日、人間の勝手さを汽車賃にこちつける浅間しさがうかがわれる。破調とか文字の上の鋭さが本当の鋭さでなく、こんな內容の鋭さを推奬する。只謹むべきことは、句の內容を読みとる限度である。作者の身分職業を知りすぎて、この限度を超える滑稽を見る。今の川柳家は後進を導くに熱がないと思う。一題の選句に換えていゝ句の狙いどころ、沒句のわけ及び更生法を説くべきだ。

白星＝得手勝手な悲しい立体の動物達よ。フレッシュな紫煙をふかす例のニヒルな知性が冷たく笑つて世紀末の晩鐘を叩いても、所詮可愛いゝピエロの樣には彼らの自善生活に焦点を合わせはすまい。

野介＝路郎師の句だが、どうも戴けない。川柳的な匂いが強すぎるようだ最近の川柳塔の師の作品では「麦の秋留守の農家の時計鳴る」などいい句だと思う。これには、はつきりとしたイメージも浮ぶし、新鮮さを感じさせる。後進を導くこととわかり易い句を書いてもらう事とは別の事だ。何等かの强烈な魅力ある句だけが多くの人を引つぱつてゆく。

山雨樓＝諷刺がこの句の底流をなしていることは云うまでもない。事実汽車賃が昂騰したことも苦痛には違いないが、農家を疎んじてきた傾向も亦顯著である。われわれ消費者の立場からは一と先ず安心と云うところであるが、あれほど田舍の穀倉に恋々としていた連中の豹変振りには生産者たらずとも度し難いものがある。そこをこの句は眞綿で首を締めるように皮肉つているのである。路郎先生は九月二十二日の大阪日日新聞で記錄文学との一線について、川柳の持味を語つていられるが、正に一九四九年における都市から農村にかけての道中すご六の一齣である。両兄が句の指導性に論及されたことはこの句として聊か迷惑を感するところであろう。

琴の絲少女は深く春に座し

七月号川柳塔から　水客

野介＝ぼくは川柳のフイクション的構成に興味を惹かれるが、前掲の水客の句は、彼のフイクションがレアルとピッタリと合致した点に、この句を抜き差しならぬものにしている。「深く春に座し」の表現技巧は冴えたもので、少女の年齢、環境をホウフツさして余すものがない。水客が最近「動くものみんな動いてホームラン」とか「外人の大きな靴にある親しみ」とか相当の佳作を見せているが、この句も同一系列に属して多分にフイクションを帶びている。作家の観念による仮想現実が、單なる現実以上の鋭さを

もつて読者に迫る好例となるだらう。猶フイクションの飛躍した作例としては白柳子の「春日遲々として仁王さん眠くなり」など近來の逸作と云えよう。

白星＝「深く」がいい。モチーフは理解出來る。「琴の糸」「少女」「春」のコントラストはよくマッチしているものの、それは松に鶴、竹に雀の余りにも通俗的なマッチの仕方であると云えよう。如何に慾目に見ても新味は感じられない。只「深く」の作者のムードが普通妥当的感覚であるとして、その表現技巧を讃としたい。ぼくも同じくこの句をフイクションと見たい。いつまでも「虚構の彷徨」を続けていたのではと、ぼく自身のことを考えてそう思うのだが、リアルに徴してからの脱皮であるとしてこれでよいのだ、これでよいのだ、と思い直している。

山雨樓＝脚本家花菱氏は川柳の面白味を言葉駆使の奔放さ、縱横さ、斬新、尖鋭、余情等に求められた。それも一個の見解であらう。川柳の藝術性は往々にして、この言葉の魔術の中から燐光を発するからである。單に言葉と云う勿れ、川柳のあらゆるモメントがこの十七字の中に圧縮されていることを思へば、それはも早ムードでもリズムでもアクセントでもシラブルでも或はそれらの総称したエキスたるに止まらないのだ。この句の場合「深く」はリアルのある頂点を衝いた感性を生んでいる。「琴の糸」には若干の不用意が指摘される。さて、この句はリアルに喰入る川柳の一尖兵であろう。

喜由＝句評となると云いにくい事を云わねばならぬ。みんながほめているのに、ぼくがうなづけぬのが淋しい。しかし読者の中には私と似た見方をする人があるかもしれぬ。凡そ技巧が過ぎた場合、自分だけでなく人まであやまらせた例を持つている。私は過ぎた技巧を矯正する爲にかなり苦労したが、やつぱり治らない氣がする、と云うて私から技巧を封じたら果して何が残るだろうか、親友沒食子氏など、また喜由氏の技巧につられたと面と向つて選後云われたものだ。私も選句するようになつてから過ぎた技巧の氣障を切実に感するようになつた。

さてこの句「深い」と云う技巧が適当でないと思う。だと云つて今すぐ換える言葉も見当らない、或は春に座しの技巧の上に深くがあるせいかもしれぬ、奥深くの奥を略したとしたら一寸無理があろう。春浅しに対比しての深さだつたら「く」の字に無理がある。英語を訳したこう云う例があるとしたら云う言葉をしらない。琴の糸（今ひいている姿と解したい）少女を焦点とする場合、季を入れるとはつきりするが、季が無くともよいと思う。「琴の絲少女は奥の奥に座し」位でいいと思う。どちらにしても古い、いつそ時代感を入れて「表二階琴を覗けばツーピース」として場所と服装を入れて逆に吟んでも面白い。水客氏よ技巧病にとりつかれた僕を恕されたい。

スクーター柳を小鮎のように縫い

孤浪

八月号川柳塔より

野介＝スクーターと柳と小鮎の構成であるが、これもすつきりと成功しているスクーターによる時代感覚は小鮎と相俟つていかにもすがすがしい。これも作者の写生と云うよりは一つの觀念風景であるとぼくは解したい。作者は柳を背景としてスクーターを前面に押し出す事によつて、時代的な流動感をヴイヴイドに描こうとする意図を持ち、それを「小鮎のように縫い」と結ぶ事によつて成功した。單なる大都会の壕端の写生風景以上の構成感をもつていると思う。

白星＝鞍馬氏の句に「スクーター、スワンが泳ぐように行く」があつてどちらが良いだろうかと考えたが、写生と観念描写との相違だと知つて止めた。余りに映画のスクリーンを見るようで巧み過ぎると思つたが、これは茶目氣を持つたアメリカの兵隊さんのような氣がして、お壕端を走るスクーターが手に取るように見えるし、スクーターの性格の特徴がよく表現されていると思い直した。評は野介氏の評に言い盡された。前句にしろ、此の句にしろ名句ではないが綺麗な句と思う。多数の作句の中から此の二句をすくい上げた野介氏の功を賞し、その適評に絶讃の拍手を送りたい。そして氏の好評に依つて、これらの句に泊をつける結果になつたことを思い、氏の鋭い感覚に一驚する。

山雨樓＝このひけらかした主観はしかし小氣味がよい。野介氏はランドスケープ以上のあるものを感附かれたようであるが、自分は何となく平和な自由主義がちらつと横切つているように思う。スクーターの製作資材にはミリタリズムの残骸、飛行機の部分品が利用されているものが多い、思へば皮肉である。比喩体は巧緻にも粗雑にも向くが、この句は荒削りのようでスリルを漂えている。

喜由＝美しい写生吟である。しかしリズムが悪いことが氣附かれる。句の内容の検討もいゝが、こんなところも見逃せない。文字の上のリズムと字余りの処置を考えねばならぬ。私だつたら鮎から「小」を除いてリズムを整える。どうしてもスマートと潑剌さとをより以上出す爲に、若鮎とか小鮎とかを入れたければ推敲して「若鮎の如と柳縫うスクーター」とでもすればいい。着想に好意を表したい。

食品衛生法
検査合格品
砂糖なくとも…
蜂印 カリチン錠
最も合理的な…サツカリン・ヅルチン混合錠
大阪 東洋製藥化成株式会社 道修町

大衆の藝術

戸田古方

（一）大衆の意味

〃人類の一人一人が神の愛に生きる自己を見出すに至るまでは世界に平和と幸福の日はおとずれることがないであろう——柳田謙十郎

大衆とゆうことばは佛語である。普通に人々とか民衆とゆうのとは少し意味がちがう。大正の終りか昭和のはじめ頃から普通語になつてはいる。佛道の修行する人々とゆうのが正しい意味である。おそらく時代の先達が人々を精神の貧困から救ひ出そうとゆう祈りから「大衆」とゆうことばを普及させたのかもしれない。

大衆は道を求める人々である。あらゆる人々が道を求める心になつて精進した時にこそこの地上に天國も極樂も現出するのではあるまいか。

道の極まるところに宗教があり、その道程に道德の道、科学の道も考へられるが、又藝術の道もその一つである。

在家止住の凡衆にとつて親みやすく、近ずきやすいものが藝術の道だと考える。大衆の藝術とゆう題目をこの主旨にそつて展開しようとしている。

（二）どんな藝術が大衆に好まれるか

老人もふくめて今の人に何が好きですかと質問すると、映画はきらいですとゆう人はきわめて稀であろう。今だに活動写眞といつている喰わずぎらいの人も少しはあるかもしれない。金や時間がおしいとゆう理由の人もあるであろうが、時に映画館の椅子に座れない程忙しい人も、映画館の入場料の拂えない程貧乏な人も少いであらう。どつかを捜せば人々がどの位映画を樂しむかをはつきり数字で証明してくれる統計をみつけ出すことが出來るであろう。國家の指導者が施政のために映画を利用し、映画の藝術の伝

廣告が如何に有利であるか、映画中の小道具や服装が流行の先端をゆくかはこの事実を裏書している。

では何故かくの如く映画は人々に好まれるのであるか。映画は綜合藝術である。背後の関係なしに孤立して存在するものでない。文学、演劇、音樂、絵画がそれに協力している。これらと同じ系列におかれながら、そのいづれとも全く同じではないのが映画である。カメラというメカニズムが加わつているからである。素材は文学に、表現は演劇に近いが、構成單位として働くにすぎないと思われていた音樂と絵画が最近では新らしいジャンルを切開く糸口となろうとしている。しかも映画は近代資本主義生産の流れの上に生れたものであり、文学並びに演劇には中世的職人生産の名残をのこしている。とにかく近代企業形態の中に新旧調和を以てとけこませているのが映画である。

映画が大衆的になつたとゆう理由の第一は、これが公開までに少なからず経費を要することである。即原作、脚色、台本、配役決定即ち俳優の参加、撮影、現像、編集、上映等多数人を動員しなければならない。その出費を償うには大衆に働きかけるより外に方法はない。第二に鑑賞者側からいえば人々は入場料を拂ひさえすれば映画館の椅子に坐ることが出來て、一時間乃至二時間そこで眼をあいていることによつて何の努力をしないでもスクリーンにいろいろなものが写つてくれて、なだらかに一篇の物語を樂しませてくれるのである。文字にかかれた小説は読者の想像力を要求するが映画は具体的である。しかも演出者の意のまゝに対物レンズを被写体に自由に近ずけ又遠ざけることが出來るので、演劇の如く距離の制約を受けることが一切ない。しかも映画では馬の脚は不用である。

しかも発声映画、漫画映画着色映画以來音と形と色の創作も可能になり藝術表現に新らしい分野が開拓されようとしている。

さらに素材に関しても所謂メロドラマ風のものが好まれる。メロドラマとは内容的な豊さより筋や場面の変化を主としたスリルやサスペンスがあり、多少甘いものであるが、しかもそこに盛込まれたヒューマニズムには所謂ミーちやん、ハーちやんの末まで共鳴者とすることが出來る。その甘さはある時は勧善懲悪の姿をとることもある。これは人間社会に於て善なるものが要求され、悪なるものがしりぞけられるからである。これは人間の功利性である。この功利は人間の本能から來ている。人間の本能を大別して個体維持と種族維持となり食慾と性慾に直結される、食慾は生活資料の獲得となり物慾は露骨に之を取扱うことは差控えるとしても所謂恋愛ものとして非常に多く素材の中に織込まれている。いづれも公安を紊さない程度に於て取入れられている。之等のものはいづれも大衆の好みに投じる。好みに合うものが素材として登場してくるから大衆が好むのである。

葛藤の素材をあたえ、性慾は

（三）大衆藝術はどんな性質をもつているか

何時頃、如何なる狀態に於て藝術が大衆と結びつきはじめたかという問題を明らかにすれば、この題目を最も興味深く理解することが出來ると思う。そのためには映画よりももつと古い時代から大衆に親まれたものをとり上げることが便利であろう。

大衆とよばれる人は長い間下積におかれていた。彼等が藝術と結びついたのはその下積から解放されはじめた近世以後の事に属する。これは東西共通の事実である。近代藝術は原始藝術の弁証法的発展の結果、高度に展開されたものであつた。人々の藝術であつたものが、支配者によつてうばひとられ、その圧力の下窒息狀態におかれた。

ルネツサンスに於て芽生え

た藝術はエリザベス朝、ルイ王朝の專制彈圧をへてフランス革命後にはじめて開花したことは「近代文学としての川柳」に於て吟味したところである。日本の近代文学は足利時代の狂言などにはじまるが開花は德川時代をまたなければならなかつた。

德川時代の大衆藝術の大宗は美術の浮世絵、文学の西鶴、近松あたりであろう。小型でさゝやかであるが川柳の存在も無視出來ないと思ふ。

浮世絵は突然出現したものでない、桃山時代の狩野派の豪華な障壁画の流をくみ、さらにその系図を大和絵にさかのぼらせることが出來る。それが大衆に喰入るに至つたのは大衆そのものに喰入らしめる素地が作られていたからであつた。

近世封建制度の崩壊は都市の発達、流通経済の盛大に起因している。封建制度は彈圧によつてはじめて支配者が安固たる地位をもつことが出來た。足利末期の乱世は武士のみのそれではなく大衆もこれに参加している。下剋上とゆうのがこれである。勿論彼等に現代的な民主精神と全く同一のものがあつたとはいえない。納屋衆による堺の自治制や山城國会の事にふれゝば充分であろう。

倭寇とそれにつゞく朱印船以來海外渡航が行はれ、又天正年中の葡人來朝による外國の刺戟は町人の蓄財額を高め、思想にも又大きな変化を及ぼし、それは德川氏によつて再建された封建制度にひゞを入らせることゝなつた。德川幕府が鎖國を断行したのはキリスト教を通じて外國人が日本を植民地化するとゆう危險があつたといいふらされ、又教えられて來たものであるが、実はその奥にキリスト教を通じて入つてくる自由思想が封建制度の根底をぐらつかせるのをおそれたのであつた。その役割を具体的にはたして鎖國日本を最後の破局にみちびき維新の周囲への原動力たらしめたものは、外ならぬ外國資本家とむすびつくことを拒まれた町人階級の擡頭であつた。

浮世絵も川柳も小説も浮るりもこうした町人階級の間に起つた藝術であつた。自然のいきおひとしてのびんとする海外との交流をさえぎられた町人の地位は、しかし一國経済の段階にあつてひときは重要さを増した。すでに前期資本主義の様相をはつきりとあらはして來た德川時代に於て、彼等の海外とのむすびつきを止めただけで政府を安泰にはおかなかつた。外にのびそこねた勢力は内にのび、蓄積された資本力によつて最上位におつた士族をおびやかし、士族の存立をさゝえる封建の基盤農民を搾取しつゞけたのであつた。

こんな狀態であるから町人には余裕のある生活をするものが多く、彼等はかつての如くしいたげられた階級でなく、事実上の支配階級ですらあつたのである。彼等にはただ政治的能力がなかつたから経済の世界にとゞまつたにすぎない。町人は新興階級であつた、したがつて彼等の持つた藝術にも新興階級に迎合する特長をもつていたのであつた。したがつて彼等の藝術はわかりやすい肩のこらないものが歓迎された。しかしルネツサンスに於けるヨーロツパの庶民がそうであつた如く、ヒユマニテイとモラリテイとはもつていたのである。彼等は人間生活をよりよくするための藝術をもつていたのであつた。一般に教養の程度の高くない彼等の藝術が笑と性慾とを求めたのも又うなずけるところである。なぜなら、その二つは人間の二大本能とむすびつくからである。笑ひはみちたりた生活から生れる、個体維持の本能を、そして性慾は種族維持の本能の具象だからである。

浮世絵とは如何なるものか。初期の肉筆時代は高級な限られた鑑賞家のみのものであつたから、大衆のものとは云うことは出來ない。著名な画家というよりは市井の職人的画人によつて下絵が描かれ、彫師、刷師なる専門家の分掌によつて版画となり、さらに絵草紙屋なる資本家が一役買うに至つて普及されるに至つた。それは一つの組織より生れたものであり、比較的安價に頒たれ、市井人に愛玩された。

だがしかしその作品は決して藝術的に低いものでないことは日本人より外國人によつて証明され、フランス印象派がその影響によつて生れたことはあまりにも有名である。

この藝術の支持者は市井の町人であり、町人階級は黄金力によつて支えられた無冠の帝王であつた。しかし彼等は教養に於て比較的低かつたので、肩のこらない、むつかしくないものを求め、且つ個体維持並びに種族維持の本能に結びつくのも又当然であつた。浮世絵の秀作が春画に数多くあつたということは語られて來ている。大衆生活が無意識のうちに性慾と可成露骨に結びついていることは「腰を入れる」「水ももらさぬ」「もとのさやにおさまる」「知らぬが佛」「水をさす」等の語が不用意のうちにきわめて自然に用いられていることを以てしてもわかる。川柳が浮世絵と同様に大衆に愛され親まれた理由も川柳に「末摘花」の如き肉体文学があつたことをいへば理解出來る。だが川柳のジャンルはむしろ笑にあつた。浮き世絵は又憂き世であつたことは古今を通じて大してかわらなかつた。憂き世を浮き世にしたいのは大衆の念願であり、その念願のあらわれが笑を求めることとなつたのである。川柳の笑ひは「おどけ」よりアイロニーから來るものであつた。川柳即皮肉文学と考へられるのも無理はない。

（四）その性質はどのように大衆とむすびついたか

大衆は何を好むか、轉じて大衆の性質は何かを考えることからはじめよう。これは心

教育楽器はヤマハ
日本楽器
南区心斎橋筋二丁目ノ一
電話 南 ㉕ 3413 番

近作柳樽

母独り娘の嘘を聞く生活　兵庫縣夏六
鉄骨を霧は默つて抜けて出る　同
速達を追い越して來る里帰り　同
温かい嘘にかこまれ母臨終　同
心境の変化机の位置を変へ　同
藝術を捨てゝオヤジの跡を継ぎ　同
疑ひもせず貧乏に慣れてゐる　同
非農家も声を合せて照りを褒め　兵庫縣舜花
菜園のもろこしばかりよく育ち　同
牛盗られ蠅の少ない夏を越す　同
告別の辞明日の我が身のことに聞く　同
加配米もらう労務の恥しさ　同
失恋は無かつたことにして嫁ぎ　同
麻雀が明日の天氣を言うて散る　兵縣庫白鬼
表情は虚無サンドイッチマンは行く　同
職を持つ身に満員車も愉し　同
橙酢女の指に力あり　同
一度死んだ生命何かに捧げたし　同
たつた半日紋付に草疲れる　同
夢すでに消へて地下足袋四十過ぎ　大阪市草々
税金の以來心から笑はれず　同
3チャンの此処で買ひなと云ふ漫画　同
亀の餌五円ゴーンと暮れて行く　同
現実は財布はたいたくじさえも　同
サーカスで死んだ子想ふ子に出逢ひ　同
党員と聞いて断る婿養子　貝塚市千舟
学藝会バックは金と銀の星　同
銭湯のお女將へ旦那來た報らせ　同
お茶ひいてゐる妓にお女將肩揉ませ　同
税務署へお女將は別な笑ひ見せ　同
寝室で旦那小切手書かされる　同
その実は馬鹿者ばかり敗戦記　今治市文庫
退職をすれば無能な生字引　同
常識論若き主義者に言い負ける　同
積みあげて賣れは賣れないダイジェスト　同
創作として迷惑を顧みず　同
インテリが軽べつをする本が賣れ　同
靴下駄の意識都会の石畳　廣島市嚴童
廣島の秋空
ピカドンを今にも落しそうな鳶　同
散歩のコースに貸本屋も無論入れ　同
一向に上手にならん隣りのピアノ　同
共稼ぎ夫馘られて帰つて來　同
女中にも二号になつてみたい夢　同
安物は損とは知れどさりながら　愛媛縣旭
ざんこくの一語につきるハイたき　同
長尻に居眠戰術でも勝てず　同
虚栄心返済請求などさせず　同
かくなる上は人夫にでもなる氣　同
眼帶をしても映画にだけ行く娘　滋賀縣美秋
父だけの用でバリカン錆を出し　同
寄り添ふをヘッドライトにさらされて　同
せびられる身とは知らずに恋をして　同
垢じみた首にブラ〳〵首飾り　同
くだらない話はつまり面白い　小松市茶佛
子を叱る元氣もあわれ父になし　同
頁繰るだけでいゝこと書いてある　同
印象は[illegible]うかと父のこだわらず　同

理学に関係のある問題である。人は慾望をもつている。慾望がなければ生きて行けないが、慾望が放逸に飛び出すと整理しなければ社会の秩序はこわされる。法律も道徳も宗教も範囲こそ異れ、この整理に役立つ。

これとは別に人はめいめいの慾望を極度に放逸な所へおし進めたい性質をもつている。これが悲劇を喜劇を又ある時は残虐を、犯罪を好む心理に通じる。しかし悪い一方ではない。善悪のヒューマニティのおこるのも又そのあらわれであろう。要は狭い倫理観ではない。倫理、道徳は社会適應の必要上発達したもので、人はそれにわずらわされることなく善悪の行動をしたいのである。

大衆の好きなものに火事と喧嘩がある。冒険がある。スリルがある。かと思うと義憤とゆうようなものもある。森の石松や國定忠治の侠氣や義賊鼠小僧の次郎吉を愛する。時にはもつと純粋の悪の華さへ好まれる。近松に、不如帰に泣くのもこれである。曾我廼家五郎の劇は藝術批評家の批評とは別に大衆に支持されていた。五郎劇の魅力は相も変らぬ勧善懲悪だが、それが大衆の理想に合致した。

大衆の理想は現実的である場合は論理の飛躍も意に介しない。それは射倖心にも通じ宝籤や競輪、競馬に走る。スポーツもこの範囲から遠くない。スポーツマンシップとかフェア・プレーが起つてこなければならない程斗争本能を満足さし、優越感を満足さすものをもつているからである。記録（レコード）の夢、勝利の夢、そして最も高尚なものとしてスポーツマンシップの夢、幸福な平和な社会樹立を夢みている。

ビヤホール みどり
上六交叉点角西北

大衆の夢は現実的である。飲む夢、打つ夢、買う夢、そこまでゆかなくとも恋の夢、金の夢、そしてちよつぴり名誉の夢、そして甚だ稀れだが人類幸福の夢をもつている。

こういう大衆が藝術をもつとすればそれは高尚なものに始めから向くはずがない。藝術は直接金儲けにかゝわることが少いから彼等とても、藝術から直接金儲けの法を学びとろうとはしない、そこでせめてと恋に向う、それもプラトニックなものより、肉慾を求めがちで、したがつて藝術としてのあらわれ方も肉慾的にならざるを得ない。一番わ

お友達ですと共学悪びれず　同
また飲むと聞いて仮病を考へる　熊本縣斗四翁
筆不精かんじんな名をおとしてる　同
封建の家に今でも白髪染　同
鼻につく二度目の母の鏡掛　同
一切の尻を辞表で拭う氣か　同
紀元節歴史の嘘の初めなり　岡山縣満年
夢もない孤独へ婿の口があり　同
愛人が出来て孝行あとまはし　同
汽車の箱支線は明治の垢がしみ　同
橋だけが立派で村は金詰り　同
夢をすてるのですよとはなむける　岡山縣茶々
おしやべりな会員便利に扱はれ　同
公衆電話誰れはゞからぬ甘えよう　同
眼鏡ごし射すくめられておろ〳〵し　同
P・T・A子供のうそがばれてゐる　同
アルバイトにまンマと騙された　金沢市陽々
ノーマネー此頃物價下るなり　同
なつかしや此所にも富山の藥賣り　同
素直には成れずマ、子もマ、母も　同
逞しく貧乏馴れがして仕舞い　同
將棋の駒を握つて電話口　大阪市葉光
待ち兼ねた便り葉書で簡單に　同
蜉剃らず働く顔の眞劍さ　同
待ち合す時間正しい儲け口　同
愛情佛心女生んとする供述　大阪市沐天
やはり脛かじりながらの自由主義　同
ヒロポンをタバコの様にまた射つた　同
現代の俗吏となつて家を建て　同
此の蠅を僕が叩くも運命か　大阪市旅風
虫の声なりと聞こうようちの庭　同
果物屋もう秋ですの並べやう　同
家族連れ改札口を讓られる　同
コップ酒おい兄弟と云ひたそう　廣島縣芳泉
落付かぬ内に百万円は消え　同
キスされた跡押し拭ひ〳〵　同
男にはもうこりましたミシンふむ　同
すりへつた神経痛し三十八　大阪市春雄
古ノートこんな処に父の遺書　同
物干で何はなくとも月を見ん　同
日曜日我が子一人をもて余し　同
子をだしに親が花火をもて遊び　岡山縣湖月
赤い帶夢見た頃もありました　同
夫より強いお酒で物足らず　同
妹にだまされた夜のふと淋し　同
馘切りを逃れた側は目を伏せて　貝塚市庸司
社長をばやり込めた日が去來する　同
子が五人あり降職へあまんじる　同
復員のその後無口な日がつゞき　同
白髪染でもごまかせぬ年と成り　尼崎市聽松
老らくの恋を羨む同い年　同
金遣い荒いとこだけ親に似ず　同
避姙藥もう手おくれの子沢山　同
接吻といふ字も使ふ綴方　和歌山宏方
金槌で靴は打診をして貰ひ　同
日向葵は日光浴のすきな花　同
あんちやんの服縞馬に似てる柄　同
附添婦外科の患者につきたがり　尼崎市ちか子
乳母車押して市場ではかどらず　同
降つて來た音に珍客時計見る　同
連れて來た子に恐れ入る女客　同
感激は轉げるやうに上陸し　鹿兒島華水
デッキから坊やよこゝが日本だ　同
つぎはぎの紙幣税金によつて出し　同

かりやすい享樂だからである。それとも一つは笑ひである。藝術を鑑賞するだけならあえて笑ひにかぎる必要もなからうが、一たび創作に関與するとすれば直接的な笑ひが哀しみの表現より魅力をもつのはうなづけることであろう。

（五）大衆は藝術の創作家になり得るか

私達が英語を習つた頃、英文和訳だけでは一つ腹に入りかね、和文英訳を併用して初めて少しわかりかけて來た経驗をもつている。自分で作つてみたくなるのも又自然である。

しかし藝術の創作となると誰でも出來るとゆうわけではなく、創作家を大衆と限定してしまえば、問題となるのは彼の才能より、彼の境遇である。いろいろの條件がそろわなければならない。時間、場所、道具、金、年齢等々である。つゞめれば暇と金になる。本職があるので金と暇とが思う様に手に入らない。だから鑑賞家にはなれても、創作へは二の足を踏む、創作のための創作より、鑑賞のための創作という方がより大きな意味をもつ。

しからば大衆に創作可能な藝術とはどんなものだろうか。

浮世絵にかぎらず絵を描くとゆふことは可成天分を要する。どうにか型のとれる人でも隨時隨所で思う通り描こうとするには、基本練習を要する。これは音樂とても同様である。手の練習の外に耳の練習や眼の練習も要求され、鑑賞家として耳や眼が肥えてくれば尚さらおじけがついてくる。これを調和さすには金と暇が要る。年期仕事である。これは頭から大衆には不向きである。

この困難を比較的克服しやすいのが川柳である。同じ短詩型文学といつても詩や、短歌、俳句は約束が多く、あらかじめ身につけておくべき教養が用意されなければならぬ。川柳が専門家藝術というより余技藝術として発達して來た理由もこゝにあろう。

川柳は事実上極端にいえば

にきびとり美顔水
桃谷順天館

遺骨抱く駅のラヂオはヂヤストなり　同
統制の物で飾つた社長室愛知縣吐　平
警察と判つてお茶を入れかえる　同
適職でないとは親も知つて居り　同
麻雀で勝つたを妻は見逃さず高槻市白溪子
ダンサーの恋封建性につきあたり　同
借家にも馴れて花嫁よく動き　同
エロ本も鞄の底に旅終る岡山縣鉄　字
かつぎ屋は今日の儲けに酔うて居り　同
見栄でない生きんが爲のドレスです　同
遺作展その薄命を惜しまれて兵庫縣正　司
初勤め父ネクタイを締めてくれ　同
友人に藏と呼ばれてよくはやり　同
おむつまでしかえてやつてこやまがられ大阪市梅　風
ルンペンと笑ふ姿に誰れがした　同
ひざまくら肩書ほどのやぼでなし　同
悲しいと言はぬ女をいとほしむ三原市正　一
未亡人或る夜の客の氣を損ね　同
平和です夫婦でキャラメルなめながら　同
産制を失敗しました兒をかゝへ大牟田風　浪
恋は憂し熊度で意志を読まされる　同
愛情の深さ安樂死を選び　同
脱税の手口参考書にも無し岡山縣富　至
法案を待たず鼠が米を喰ふ　同
こう薄ふ街の松茸切れたもの　同
ビラ貼りを眞面目にやつて馘首さる富山縣三　峯
ばしつと焚きつけて妻の仕舞風呂　同
雨垂れをぢつと眺める暇が慾し　同
一枚のカッタに壽命が來てしまひ貝塚市一　郎
お追従淋みしき一日暮れにけり　同
会ひたかつたあたしも後は御想像　同
失業をしても眼ざまし時計鳴り大阪市五　郎
本日開店もう一と月も経つたのに　同
共産党のはり紙らしい赤インク　同
洗濯の手を兒が泣いて又拭せ愛媛縣孤　峰
郷愁はコップに野菊挿して見る　同
人の世の隅で平和に炭を焼く　同
背の高いことをほめたりけなしたり鳥取縣夕　路
警察の寄附はだまつて出して呉れ　同
國訛出して主人の唄となり　同
猛犬居ります犬の小さ過ぎ堺市太　路
言わすだけ言わし大臣うなづいて　同
成金の怒れば地声國言葉　同
とりあへず作つた弁当雨になり姫路市和　水

六甲登山

山こえた証拠に水が逆流し　同
旅先のほこりおとして子に話し　同
子の世界風呂も遊びと心得て愛媛縣曉　明
日本の政治流れる橋も架け　同
いつからか柚子の風味をほめる年　同
狙撃する様に募金は怒鳴りかけ今治市松　花
引揚の話割引して聞かれ　同
役得の時はだまつて出掛けてる　同
渡守り公営になつてから默し高知市元　馬
秋の空己のが心も乾ききり　同
コスモスにふつと我が身を省みる　同
オールドミス人道主義に傾きぬ兵庫縣無　聖
新妻を心斉橋で競らべて見　同
抵当の畑へ茄子の色が好く佐賀縣えいを
リレーする事を知らずに蟻運び　同
嫁入に水虫遂う〳〵ついて行き熊本縣砂　川
通帳も指環も見せてサロンの灯　同
目前に嵐が來てる夫婦の目熊本市室　久
赤旗へ大手展げた母の愛　同

何の準備もいらないともいえる。文字通り隨時隨所は可能である。床上、厠上、浴上、歩上、その上仕事の最中でも想をメモの端にかく位いのことは出來るのである。道具は一片の紙とチビ鉛筆でことがたる、それすら物覚えのよい人には不用である。吟社に入り本を読めば若干の金はかゝるがこれは作句の第一義でない。老人は老人の、幼兒は幼兒の、男は男の、女は女の、そして聖者は聖の、凡者は凡の富者は富の、貧者は貧の句を作ることが出來るの川柳であり、このバラエティこそ貴ぶべき作品を生む。

隨筆をかくよりもさんしょの如き一句がものされた時のうれしさは、川柳人のみの知る醍醐味である。

以上のことよりして、川柳は一應誰でも手がけることが出來ると結篇することが出來る。

川柳にも限界はあるし、はじめから佳句、秀句を求めることは無理だが、初心者の句といえども全部が舌足らずであるわけではない。味とゆうものは生れてはじめて作つた一句からも見出せるものである。

（五）理想社會と川柳の使命

人が夢をもち、夢が理想社会の実現の第一歩であるとするならば、上下をきたり、堅くなつていてはダアである。もし藝術を通して、それが出來るとすれば、こんなよろこばしいことはない。

しかも、川柳が、百万人の藝術でありとすれば、川柳こそ、理想社会実現への重大な使命をおびたものといえよう。

理想社会の実現は、慾の整理、清算によつて成立する、川柳こそ間接漸進ながらこの道を往く。

川柳の役割は大きい。

川柳と宗教について書いてみたくなつた。

一九四九・九・二八

「川柳雜誌」の旧号の欲しい方は往復ハガキで社の係まで

子沢山氷襞までも準備させ　大阪市詩　朗
月を見てたのしむ程の身でもなく　同
生存の意義を求めてさまよう身　鳥取市秋　男
エロ本をずらり並べて露天商　同
ヘボ文士お天子さまを賣りものに　大阪市平　三
金詰りどこ吹く風と二号さん　同
バラック建今年の秋も虫が鳴き　大阪市薬　栄子
男女同権ビヤホールでも行きませう　同
抱いた子を妻に渡して見送られ　大阪市草　右
見つけられ何処だ〜〜とチボは逃げ　同
十八九リボンを替えて出勤し　大阪市惠　風
アルバイト病む弟の本も買ひ　同
愛人に星の講義をしてもらい　大阪市牛　歩
水害へ案山子は殉職したらしく　同
人間がするのを猿がして人氣　東京都東　夢
子をねかせ女房も雨戸に虫を開く　同
パートナをよつて踊ればけつまづき　香川縣朝　兒
安定所まあ根氣よく來いと云ふ　同
同窓会会社の宣傳して仕舞い　大阪市文　雄
子を負うてお前の誕生だ何買はう　同
たわむれの恋とゆるさぬひとがあり　大阪市司　郎
街録に故郷をしのぶなまりあり　同
百姓が小さく見へる諸畑　岡山縣秀　鶴
明日ありと思ふ心が平社員　同
集金の予定は立たずたゞ歩き　東京都高　志
嘘ならば余計嬉しい子を孕み　同

映画黄金に関する雑吟

殺掠を終へて孤独が身におそふ　姫路市凡　夫
包裝の中に郷土の新聞紙　同
女権論まくし立てたに角かくし　大阪市志　津
別瑯の父出張と云ひきかせ　同
秋なれや諸が三十五廷來る　東京都万　年
秋の子等泳いだ川へ絲を垂れ　同

村政の裏も御存じ地藏尊　今治市映　月
乱立の美術の秋にとまどいし　同
キッスなんかとしたような事を云ふ　滋賀縣徹　二
金のない足京極に來て止り　同
山涼し芦屋夫人の絹團扇　大阪市翩　骨
人妻になつても大劇タカラヅカ　同
眞相を祕めて鉄路の錆となり　池田市木　声
ゴミ箱をのぞき廻つて活きてゐる　同
ボロ襤されど自由の我が家なり　大阪市きはち
街録に舌かみそうに氣焔はく　同
踊る娘へ珍奇な眼燃え上り　宇部市金路郎
朝風にかにとたわむる旅の宿　同
病人と慨めてか蠅の大胆な　大阪市小　柳
女みな自己のポーズを知つてをり　同
唯歩くだけです僕はエキストラ　今治市醉　歩
父の愚痴先代迄は大地主　同
ギター彈く背中の傷々し　岡山縣梯　梧
お天氣になつて面会來なかつた　同
破れ傘の下に母と子強く生き　香川縣迷観子
さゝやきも片手の團扇たへずゆれ　露集
親切な医師の言葉にかしこまり　大阪市桃　村
戻つてくるかも知れへんと嫁にゆき　大阪市孤　舟
父親の涙奥齒でかんで居る　廣島縣白　竜
垣したがお役所ばかり建つそうな　布施市柏　葉
氣まづい夜別々の灯の下にいる　三重縣勢　火

——社の黒板——

短冊を書く稽古の会を左記により開催致します。柳人はどなたでもお越し下さい。

日時・十二月十日（土）午後二時—四時
場所・川雜なんば連絡所（北極星三階）
材料・稽古用短冊、筆御持参のこと
会費・二〇円

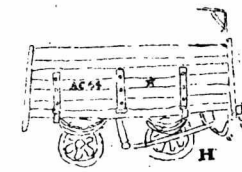
不朽洞會から

▼川村好郎氏（東京都）は毎月東京支部で不二、白星両氏や氏のグループで愉しい句会を開催されてゐられるとのこと▼古川魔花麗氏（ホノルル市）は二ケ月前からホノルル市のK・U・L・Aラヂオステーションの毎日曜日、朝の二十の扉の司会者を担当してゐられるが、ハワイ放送界に異色あるプロとして非常にもてゐるそうである。日本の二十の扉と違つて布哇語、英語、日本語等多数の國語が自由に使用出來るので、材料の範囲が相当に廣いので面白いそうだ。▼渡辺孫揖氏（大阪市）は大阪市交通局病院長を勇退された。▼岡村路三氏（山口縣）は川雜久賀支部句報「大島」の二〇号を出された▼築山快夢起氏（ホノルル市）から路郎主幹執筆の句評「食」の句に就てのプリントが届いた。▼宮田不二氏（東京都）は北海道の旅へ子から続々と手紙が來るので、書く会社だが夜は手紙書きでうれしい悲鳴をあげてゐられるとのこと▼蛭子省二氏（愛媛縣）は十月一日から摩に就いたり茶の間に座つたまゝ過したり、病勢常ならぬありさまとのこと、しかし廿三日に句会を開くから病氣でも出席してくれと相談を受けてゐられるとか▼渋田右開博士（東京都）は相変らず病床に釘付けだとのこと、しかし認んたり書いたりしてゐられるそうである。本誌への原稿も臥床中の執筆であることに感謝してゐる。▼竹田青穂氏（大阪市）は市電交通局を勇退された▼渋田久米雄氏（岡山縣）は九月卅日、JOKKから、大森風來子氏、榎本総夢氏、岡山税務署長の四人で税金に関する川柳や話を放送された。▼扇田山雨楼氏（横浜市）は十月一日から赤坂の國会図書館に勤務されることとなつた。▼路郎主幹は十月八日午前十時十分発で西下、岡山縣弓削駅に美作支部同人に迎えられ、駅前の樺原旅館に投宿、翌九日正午から弓削小学校の講堂で支部創立句会に臨み、翌十日は支部同人諸氏と茸狩、翌十一日津山廻りで姫路市の支部創立句会に出席され十二日帰阪された。▼戸田古方氏は十月九日の大和雅談会の川柳と漫画の話へ、路郎主幹の代理講師として出張された。なほ上田翠光氏も講師として出席。▼村田流水氏（ホノルル市）は帰布せられて以來健康すぐれず、とぢこもつてゐられる由、來朝当時の活動が過ぎたのであらうと案じてゐる、一日も早く復旧されることをお祈りしてゐる。▼山分北路氏（岡山縣）は淑郎と改号された。▼高田抱逸氏（大牟田市）は三池染料の七月の移動で保安課に轉ぜられた。

▼下記の会員諸氏は一身上の都合により九月末限り退会された。

下山清潮氏、手島一舟氏、南鼓扇氏、多田一波氏

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田薬品工業株式會社



秋春筆雑

あらい鼻いき
（非詩論の根拠）

宇井無愁

川柳が詩であらうとなかろうと私にはどうでもよいことで、川柳家というものは昔も今も窮屈な十七文字で勝手な熱をふいてたのしんでいるものだと思つていましたから、麻生氏からたのまれた拙文が賛否の論をまき起そうとは予期しないことでした。あれは柳界の動向にうとい門外漢の一家言にすぎませんが、本誌九月号の戸田古方氏の「近代文学としての川柳」を拝読して、私の非詩論が全然理解されていないというよりは、川柳詩論を支持する人々が「詩」そのものを正しく理解しておられるのかどうかという疑問すら生じましたので、あらためて私の非詩論の根拠をこゝに述べたいと思います。たゞし拙文に賛同された石原青竜氏の非詩論については、私は何一つ知るところがありません。

西欧の近代文学発展の方法論をそのまゝわが江戸時代庶民文藝のあり方に適用されることは非常に危険で、かえつて江戸文藝の本質を見失うことになり、非常識なひいきの引き倒しですが、川柳に何か文藝学的な基盤をあたえようとされている筆者の熱意もうかゞえますので、こちらもすこし理窟ぽいいゝ方をさせてもらいます。

"詩とは何ぞや"といふ戸田氏のお説には私も賛成で異議はありませんが、一ばん重要な詩の本質について説明されることを氏はお忘れになつたようであります。川柳が詩であることを立証しようとされる方が、詩の本質について説明をはぶかれたのは、うかつとしか申し上げようがありません。

川柳詩論を支持される方にとつては、シヤカに説法かも知れませんが、詩の本質はいうまでもなく「韻律」にあります。詩が「言葉の音楽」であることは、詩人――いや、私のようなあまりにも散文的な小説家にとつても、きわめて初歩の文学的常識にすぎません。ところが戸田氏はこの点には一言もふれておられません。これが「詩論」でしようか。

「アリヤ アリヤ アリヤサ」「スツチヨイ スツチヨイ スツチヨイ」――この無意味な、しかし感動的なリズムをもつた言葉を、私は詩のもつともプリミティブな形式と考えています。ところで、このリズミカルな言葉が意味をもつとどうなるか――

やぐもたつ　いづもやえがき
つまごめに　やえがきつくる
そのやえがきを

和歌のはじまりといわれるこの歌を五行にわけてみるとどうでしよう。立派に韻をふんでいます。「やぐも」と「いづも」。「たつ」と「つま」と「つくる」そして「やえがき」のリフレイン――完全な詩であります。

あしびきの　やまどりのおの
しだりおの　ながながしよお
ひとりかもねん
あきかぜの　ふきうらがえす
くずのはの　うらみてもなお
うらめしきかな
みちのくの　しのぶもじずり
たれゆえに　みだれそめにし
われならなくに

万葉古今を問わず、人口に膾炙した歌は意識的に韻をふみリズムをもち誦するによく、それゆえに人口に膾炙する結果となるので、和歌の韻律美は古今集において頂点に達し、定家が小倉百人一首を選んだ基準もまた、その韻律美におかれたと私は考えています。

かれ枝にからすのとまりけり秋のくれ　（「カ行」による統一）

しづけさにたえて水すむたにしかな（「サ行」と「タ行」による統一）

あけぼのやしら魚しろきこと一寸

わせの香やわけいる右はありそ海

こういう韻律美の追求が度をすぎると、和歌では古今調の文字や言葉の遊戯に堕して、反動的に復古調がとなえられるようになり、一方連歌となつて談林派のシヤレやかけ言葉の遊びから蕉風の「詩への復帰」となつたことは、日本文学史の教えるところであります。

戸田氏が「川柳の系譜」に述べられているとおり、川柳は江戸雅俳から独立したものですが、この江戸雅俳がすでに詩を忘失した単なる言葉の遊戯にすぎなかつたのですから、柳樽のどの句をとつてみても詩の韻律美など発見できないのは当然で、そんなものははじめから問題ではなかつたのです。すなはち川柳が十七文字の散文であつて詩ではないという、私の非詩論の根拠がこゝにあります。

こういうわかりきつた詩の本質が柳界では忘れられているのか、いまさら川柳詩論非詩論が対立するなどとは、われわれ門外漢には奇異に思われます。戸田氏が詩に下された定義は詩の半面にすぎず、散文にもまた同様なことがいい得るとすれば、詩と散文とをあきらかに区別するものが「韻律」であることは初歩の文学的常識であり、古今を通じて変りません。

もつとも現代の詩人と称する人たちにも、この初歩の常識を忘れている人があるとみえて（なかにはこの常識から抜け出そうとする努力から）皮肉屋の辰野隆博士から「日本の現代詩は行を分けた散文である。」といわれています。漢詩にもむろん韻律があり、いわゆる平仄でありますが、原音の平仄も日本語読みにすると完全に韻律が崩れてしまう。そのことを忘れてやたらに意味あり氣な漢字を五字なり、七字なりならべたのが、いわゆる和臭の漢詩で、だから何の文学的素養もない軍人や政治家にも手軽に作れたのです。それとおなじことが、一部の詩人や川柳家にもいえるのではないでしようか。

川柳が詩であることを欲する必

柳人交歓新春募集広告

是非一ト口は！

★一ト口金百円
幾口でも申込まれたい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞ふ一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十一月末日限

★広告料は前金のこと

川柳雑誌社

山之内

血圧降下に
アーグレミン
定剤
注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

要はない、それは川柳の自滅だと私は考へるのですが、それでも川柳を詩だと思いたい人は、少くとも近代のすぐれた詩——白秋、犀星、朔太郎、春夫くらいは読んで、詩とはどんなものかを理解した上で、詩論をたゝかわしてもらいたいと希望します。

最後に柳樽よりはいく分「詩的」な武玉川の一句を附加して門外漢の妄言を謝します。

いま出た海女のあらい鼻いき

川柳普及の実際（下）

丸山弓削平

次に川柳興亡の因をなすものに知性の問題がある。川柳は大衆詩であり、通俗的であるために知識人は兎角川柳を軽視し勝ちである。川柳は過去に於てそう云ふ風に扱はれる内容と作家層をもつてゐた。

時代は常に新しく深いものを追求して止まぬ、川柳非詩論を得々としてゐては川柳は衰亡の一路を辿るであろう。川柳を愛好する者に川柳を読む人と、川柳を作る人とあることを考えなければならぬ。川柳は読まれて親まれたが作つて親まれることが少なかつた。川柳を愛好する所謂大衆なるものは、現在と將來の川柳の創作には程遠い人々が多い。

それらの人々によつて作られる川柳であれば、前進して止まない時代にとり残されるであろう。大衆とは何か、大衆とは現在に於ては低俗な面白い句を愛好する人々許りではない、知識人も亦大衆であることを知ればならぬ。こゝに川柳は作句する大衆、知識人に魅力をもつ川柳であると共に、それら知識人に川柳普及の方向を向けなければならぬ。もしそうした努力を怠るならば少数の知識人によつて、詩性にまで高められた現在の川柳は、過去の大衆の支持を失ひ、前進する未來の分野を得ることなく、自滅の運命に会ふか、或は過去への退歩を余儀なくせしめられる危険を包含するに到るであろう。

現在の川柳が知識層に、或程度魅力を持つ段階にある以上、少くともわが川雑が確にそうである限り、知識人への普及に強力に努力しなければならぬ、或はそうした会員を擁してゐる会も多々あるであろうが、それは職場交遊関係によつて生じたものであり、意識して、そして部分的でなく全般的運動の展開を主張する私の論を不要とする材料にはならない。

わが弓削川柳社が斯うした方向によつて得た結果は短期間に既に私が追迫される状態であり、川雑近作柳樽欄最近の岡山縣投句者は、全部会員であつて、それは会の中堅新進作家の一部である事を知るならば必ず上述の意を納得される筈である。

以上の二点を実証する弓削川柳社の実相を簡明に説明してその裏付とすると共に、実際上の氣の附いた一、二の事柄を併せて述べて見度い。総てものを例証するに誇張と粉飾が無ければ川の中の石よりも自分の掌の中の石の方がその重みが良く判るからである。

弓削川柳社は上述の如く今年初めに創立した。その大要は日本一の川柳町と云ふ目標を樹てたこと、それを実現する爲に毎月一回句会、句報の発行、町内各部落へ分会の設立、周辺町村に支部の設置、而して対外的には川柳祭（夏祭と共催）川雑美作支部の創立、年一回川柳大会開催、年一回会員句集の刊行（予定）等である。

会拡大の手段としては、普及に熱意ある会員三名位を中軸とし、会、支部、分会、みなその方法を採る。会員には必ず何名かの会員獲得を理解の上に立つての自発的運動として行はせる。総ての会員が実に熱心に協力され、自から分会を設立した中堅会員も出來た、又特記すべきは、汽車通勤者が七面山君を中心として旺んに汽車中

課題吟

美秋　華水　弓削平　日濤子　玲之介　柳亭　醉歩　正次　葉光　孤峰　太路　七面山　吉備平　雷丹子　柳亭　弓削平　秋男　水客

同・ピンポンの窓へ初秋い摩耶六甲　同

人・スリッパペタ〳〵宿のピンポンのゼキに來　万滴

評　一面識もない人々に交つてやがてカウントを取るであろうスリッパの主、温泉宿の一刻が思ひ出されて微笑ましい句。

地・新廳舎もうピンポンの音がはれ　茶佛

評　丈なす夏草の其処かしこに足場材がまだちらかつてゐて、塗りたてのペンキが匂うて來るやうな建物が眼のあたりにうかぶ「もう」の二字に役人への軽い不満と皮肉がうかゞわれて面白い。

天・町工場ピンポンだけの運動部　満年

評　理解なきに非ず。野球チーム一つ作るだけの頭数も揃はない小さな工場なり、それでゐて「部」と名づけなければ得心の出來ないのが現代日本人氣質か、労資の世界も川柳家の手にかゝつたら、あんまり腹の立てやうもない。

軸・ピンポンへ虚弱兒童は放つとかれ　翠光

ピンポン

上田翠光選

ピンポンも婚約中と云ふ馨き　水客

ピンポンは不幸を知らぬ音を立て　同

ピンポンに勝ち風鈴の下のお茶　鮎美

自像画がありピンポンの部屋楽し　同

ピンポンのミスはパットの裏を見る　夏六

カーテンを閉めてピンポン又始め　芳泉

カウントも取らずピンポンへたもがれる　不二

女学生もうピンポンで乳房がゆれ　山雨楼

ピンポンのフォームは父の方がよし　一葉

いゝ人と組んだピンポン勝ち残り　鉄字

垣根越ピンポンの音聴まじそう　無聖

ピンポンのリズム互角の音に冴え　旅風

ピンポンが会議の果てを打診に來　齊花

看護婦の寮ピンポンの灯が明し　千舟

怖悍な瞳はピンポンを勝ちつゞけ　斗四翁

恋人とするピンポンの氣の配り　美秋

ピンポンへ金切声を出して負け　華水

ピンポン〳〵青春の符を印き　弓削平

ピンポンの球とりあげてしまはせる　日濤子

ピンポンが済むまで待つた陳情書　玲之介

ピンポンのそれから日記恋になり　柳亭

ピン球に嬲られてゐる大男　醉歩

ピンポンに相手待たせてクサメする　正次

ピンポンへ煙草くわへたのが課長　葉光

ピンポンを娘恥しそうに勝ち　孤峰

勝ちかけてゐるピンポンへ就業ベル　太路

ピンポンを課長に負けて平和なり　七面山

ピンポンの音で始まる費休み　吉備平

ピンポンは事業ばかりの事庫前　雷丹子

ピンポンの疲れを窓の風に立ち　柳亭

佳・ピンポンへ労資協調して遊び　弓削平

同・ピンポンもして四時迄の勤めとし　秋男

同・ピンポンの音にれむけを誘はれる　水客

同・ピンポンは脚氣の氣味と云ふて負け

に於て作句批評する。川柳のおかしみと穿ちの親和力は、車中に浸透して通勤者に次第に川柳を作る人が増え、他町村の廣範囲に増加しつゝある面白い現象を呈しつゝある。

斯うした運動を始めて後、川雜五月号に、前田伍健先生の「放送された川柳村」を読んで我が意を強うすると共に、その津倉村が混乱した世相の中に、平和な村であることを知つて私は喜こんだ。何故ならば、文化運動の町の指導者としての私と七面山、笑泉のトリオは文化会文藝部の事業を川柳一本に決めて、強力に推進する事にしてゐたからである。

冒頭に述べた、川柳そのものを良くすることは、一人や二人の天才的作家で実現すると考えるのは独善である。私の主張する二つの方法を総ての指導者が実行したなら、そして沢山の川柳家、多数の知識人が川柳を研鑽したならば、そこに良き川柳の道が展らかれ、そこに古き大家、綱を張つた封建的ボスが力を失ふ環境が作られるのである。

川柳の内容が良ければ、普及が促進され、川柳が普及すれば良き川柳が育成される。川柳の内容と普及は因果関係であつて、そこに川柳の眞当の繁栄が招來される。

それは決して口角に泡を貯めた放談者の大見得に依るでも無く、又大指導者の我社大事の懸命さに依つて達成されるものでも無い、結べば川柳繁栄の要諦は大指導者に一途に依存することを廃めて、我々地方柳人が奮励一番立つべき大きな責務があることを悟る可きである。悟つて大いにやろうではないか。

（昭和廿四年八月廿日　柳友の眞摯な協力を感謝しつゝ記之）

川柳よ時代と共に

靜岡忠八

俳句を作る人は、何か川柳を卑下した様な事を言い、川柳を作る人も、又俳句に対し、ほめた様な事を言はないのが通例である。

私は文才のないくせに、俳句も短歌もやつて居るが、どちらも悪く言ひたくはない。俳句は俳句としてよい所があり、川柳は川柳として又よい所があるのであつて、公平な目で見て、いづれもけなす氣にはなれないのである、だが、川柳家より俳句に趣味を有する人が多いのは事実である。それは簡單にその理由を言へば、俳句は上品なもの、藝術的なものと思ひ込んで居るためではなかろうか、私はそうした偏見に、同意しがたい、俳句と言へば、何か俳句らしい世界が別にあつて、時代や生活とは、かかはりもないものの様に思ひ込み、俳句趣味の中に、現実を逃避して居る。そして單なる風流娯樂に思つて居る事に対し、大いなる不満を持つ者である。

川柳に対しても、同様な事が言へないでもないが、俳句、短歌、川柳のうち、いづれか捨てなければならない時には、私はあつさり俳句を捨てて、川柳に沒頭したい。それはいつはりのない私の実感である。それは、君が俳句に対し理解が浅いからだ、とお叱りを受けるかもわからないが、とにかく在來の俳句の多くは、『さび』『しおり』の枯淡閑寂の境地に低滯し、封建的な花鳥諷詠にとちこもつて居るのは事実である。

私はそうした境地に滿足して居るには、あまりに現実の社会的矛盾に憤慨し過ぎて居る縁だ。私としては、あく迄も生活が第一義的であつて、趣味や藝術は、第二義的存在でしかない。

この様にして、生活と政治と文学の問題を論及して行くと、だいぶむつかしくなるが、とにかく、俳句も川柳も生活の中から、時代の中から生れ出る建設的詩でありたい。

時代と共に、すすまない俳句や川柳は今日の私達ちにとつて、無用の長物に過ぎない。あらゆる不正、不義、社会的不合理に対する反撥心——それこそヒューマニズムの本質でなければならない。

そのヒューマニズムに立脚した作品こそ、私は要望したいのである。タイハイ的な不道徳な着想に依る川柳など、つとめて除去したいものと思ふ。

——社の黒板——

★

社が難波の北極星の三階に、連絡所を持つたことを前号の「社の黒板」に一寸報じておいたが、少し手狹だつたので、三階の中二階にあつたタイピスト練習所が、四階へ引越したのを機会に、そのあとへ移つた。エレヴエーターなら四階まで昇るのが便利。

★

連絡所の長椅子で柳書や柳誌を読み耽つて下さるのもいゝし、南海ビル屋上の、電光ニュースを読んで、夕刊を省略されるのも御随意である。

東南二丁ほどのところには、大劇が夕闇の中に白く浮きあがつて見える。歌舞伎座は、窓から首を出さゞは見えぬが、半丁ほど東なので、観劇の次でにお立寄り願ひたい。

★

こゝではいろんな企劃をすることにしている。この企劃には川柳人なら誰でも参加出來る。よきブレーンの持主や、ありあまる金の使ひ道に困つていると云う人も集つて欲しい。うれしい柳界を発生させ、うまずに育成して行かふと云うのが、ここの念願なのである

（了）

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して敎むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一讀を慮む。

B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送料　金四二円

取次御注文は　大阪市住吉区遠石代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇

川柳雜誌社

好評噴々

いのちある句を創れ

花地図

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社十月例會（大阪）

十月一日　午後六時
於　大窪文化会館

夜の会が板につくほど世間も落ちつきを見せて来た。句会も熱心な顔ぶれで張り切った作句ぶりが出現した。水谷鮎美氏は句評のプリントを頒布して忠実な適評をされ、次いで路郎主幹の柳話は例によって熱弁をふるはれた。（文蝶）

出席者‖路郎・古方・絲雨・壽安・豆秋・修三・幽王・昭一・文雄・夏六・孤舟・春柳・紋四郎・勢三・好郎・忠八・旅風・醉月・正司・梅志・水都・春草・季賛・沐天・白柳子・竹莊・義次・愛論・小松園・里十九・鮎美・司郎・没食子・春巣・文蝶・丹路・籌彦・いわを・梨里・一歩

兼題「背　廣」　廊生路郎選

背廣買ふ金税務署にもてゆかれ　七面山
ハイキング背廣へ草の実がこまり　薔花
職人の背廣ボタンをまたちぎり　葉光
首にして欲しい背廣が栄轉し　文蝶
地謠に背廣のまゝで頼まれる　小松園
強い足どり背廣は手ぶらなり　梅志
この頃は背廣のフケも氣にならず　春草
フランスの匂ひが残る古背廣　春夢草
背廣着た方が手綻をはめて行く　水都
背廣着て來たに選から洩れてゐた　白柳子
慰安会背廣ないのでやめてやれ　義次
初めての背廣寫眞を撮りたがり　忠八
すり切れた背廣に父の生活詩　幽王
かけつばなされたまゝで背廣はくたびれる　古方
ボール紙の様な背廣で入社する　春夢草
ふらんすへ行きたし秋の背廣着て　豆秋
背廣もいゝがうちわに歩いて來　路郎

兼題「誘　惑」　菊沢小松園選

誘惑に負けて人生おもしろし　葉光
誘惑に勝つた涙は淋し過ぎ　薔花
誘惑に負けて嬉しい日を迎へ　七面山
ローマンスとなれば誘惑美しく　旅風
誘惑をしてもされたと親の懲　同
さりながら心引かれる袖の下　好郎
誘惑に勝つてさみしい未亡人　志津
誘惑の主と忙しく日を暮らし　旅風
誘惑の灯にまけてゐる酒を呑み　絲雨
大阪の灯が故郷を捨てさせる　勢三
誘惑にのる自惚と金を持ち　没食子
誘惑の來るとこまできた夜の底　鮎美
誘惑を知りつゝ金を握りしめ　春柳
誘惑に克つて淋しい歳をとり　春夢草
誘惑をする氣いつしか恋になり　義次
朝陽は高しあゝ誘惑の夜は明け　文蝶
誘惑と闘う合掌まだとかず　古方
退りぞけてみた誘惑が氣に掛り　壽安
誘惑をのがれて月を清く観る　醉月
誘惑に妻子の顔のちらつく日　幽王
誘惑に勝つて淋しい定期券　修三
誘惑の友をかへして宵寝する　竹莊
誘惑をはじき返して子に生きる　梅志
誘惑に勝つて長男勤めに出　絲雨
誘惑に打ち勝つた夜の星淋し　春草
誘惑の手とも知らずに泪ぐみ　志津
誘惑に勝つて淋しく掌を見つめ　小松園

兼題「沿　線」　土井文蝶選

沿線で悟り切れない出奏生　葉光
沿線の農夫列車へ手を休め　七面山
沿線に師の墓があり湯のけむり　斗四翁
沿線で顔を合せた魂け出され　孤舟
権利金十万駅の近くです　水都
沿線がまだ眠むつてる駅に着き　絲雨
家出した眼にも綺麗な沿線図　小松園
沿線に面した窓を開けぬ家　壽安
沿線の話がはずむ汽車の旅　竹莊
沿線に出す廣告のことで揉め　没食子
沿線に住んで教師とよく出合い　春巣
沿線に大漁の幟り見えて來た　里十九
沿線で飲んでアベノで起された　義次
沿線の家は仁丹など張られ　春夢草
沿線の蛍を見てる一人旅　絲雨
通勤の窓から見てる柿の色　小松園
沿線の青山白いけむりが出　豆秋
間借とは云はず沿線ですといふ　志津
沿線に住んで借家をたのまれる　幽王
沿線に城ありロクが斬り結ぶ　勢三
セパードがゐて沿線の青い家根　春草
沿線は不在地主で買取られ　いわを
沿線のマダムが午後の駅に佇ち　正司
社長のはこの沿線に居らしい　夏六
沿線に居るとのうわさ未練湧く　文蝶

席題「紋　付」　川村好郎選

おもむろに紋付で來て上座也　白柳子
ごつい手がニユツと出ている五つ紋　豆秋
世話好きな父紋付がよう似合い　水都
紋付を貸した御祇の斎司が來る　同
借物の紋の違いを氣がとがめ　醉月
貸物の紋付どうにも醉いきれず　同
紋付を着るとみんなに見なをされ　忠八
紋付の今日は優しい父であり　志津
嫁貰ふ迄わと紋付しまい込み　孤舟
虫干の紋付定紋なつかしし　鮎美
色あせてゐる紋付の懐しみ　いわを
表彰を受ける紋付貸してくれ　春巣
紋付を着た夜の父の唄を聞く　春草
紋付をたゝむ手つきが明治染み　勢三
紋付で來て受付を頼まれる　小松園
喪主として着る紋付のうを寒むく　豆秋
スカートへかくし切れない紋の跡　好郎

席題「掛　引」　須崎豆秋選

掛引のよう云はんわと儲けてゐ　鮎美
掛引は座ぶとんも出しお茶も出し　文蝶
醉ふほどに駈引の事忘れたり　正司
掛引の電報一字間違える　春草
掛引を巧みにかくす夜の酒　勢三
掛引へ商人の眼の白々し　沐天
掛引に暮して今日は土いぢり　文雄
掛引はしまへんと慣れたもの　孤舟
掛引もおどしも効かず約手なり　好郎
掛引が下手で近所に親しまれ　水都
掛引も父に似て來る船場の子　絲雨
掛引の無いにが注文とつて來る　梅志
掛引に末恐ろしい丁稚なり　忠八
掛引を見抜いたらしいうす笑い　修三
掛引は道頓堀でけつまづき　里十九
掛引が上手になつた廻り椅子　絲雨
掛引の話松鶴は奥歯見せ　紋四郎
掛引と知りつゝ話聞いてやり　いわを
掛引も少しはまぜてアルバイト　籌彦
掛引の下手はお辭儀をする許り　夏六
掛引になつてそろ〳〵ごもりだし　幽王
掛引がこみいり受話機握りかへ　豆秋

席題「寄　附」　木下幽王選

寄附少し値切つてビール飲んでいる　春巣
妾宅と知つて大きな寄附が來る　同
税金の積り寄附金出してゐる　志津
寄附取りに行つて共産党と知れ　白柳子
寄附出來る暮しを友にうらやまれ　竹莊
お隣りはいくらでしたと寄附を聞き　孤舟
学校の寄附を頼むはわが子なり　文雄
一くせのある顔寄附を集めに來　志津
みこまれた寄附へつまらぬ愚痴が出る　春柳

版寫謄田阪

大阪市北区芝田町二五

阪田商会　株式会社

電話　福島一三六九番

秋祭おこゝろまかせ集めに來　豆秋
寄附させる方が知つてる給料日　修三
寄附頼む人へうつかり笑顔見せ　文蝶
赤い羽こちらもほしい金ながら　岡王

川雑　東京支部句會（東京）

七月三十一日　於　島野寮

女の職業・居眠り・氷・雑踏・世話好き

ステッブを踏むも二人の遺兒のため　東夢
母さんは藝者來てない父兄会　白星
女秘書たゞ居るだけでやとわれる　同
ミスポリスせめての櫛を貸してやり　同
近所もう女事務とは思つてす　好郎
タイプ打つ手に力あり夢があり　高志
家政婦の過去が知りたいきりようし　好郎
婚約が決まりタイプのミス多し　不二
居眠つて居ると見せかけもたれ寄り　圭三
居眠つてゐたよな五十年を悔い　白星
居眠つてゐてもぬかりのない本屋　同
居眠りをさます薇首の大嵐　高志
会社でも電車でも疑て家で疑て　守夫
死線越え看護の母もフト眠り　好郎
税務吏へ最初は氷水にする　不二
氷枕とれてぼち〳〵慾も出て　好郎
貯金帳ひなたの氷に似てさびし　同
氷屋の旗だけ夏がまだ残り　不二
雑踏を抜けて大金ほつとする　同
迷子と聞いて子の手をにぎりしめ　好郎
世話好きになつて初老も何時か過ぎ　高志
世話好きへ訊ねばいつでもおますがな　不二
世話好きの鼻緒を立てるひともなし　同

八月二十一日　於　島野寮

泥・言訳・ワンピース・蟬・無口

ぬかるみへ離したくない手を離し　好郎
ニューフエース泥だらけになる役がつき　好子
汗を拭き〳〵言訳まだつゞけ　好郎
着訳が功を奏して年を越し　高志
ワンピース着れば女房も二十代　同
ワンピース縫ひ上ちゞに夏が過ぎ　守夫

―社の黒板―

もう社の忘年川柳大会の下相談が持ち上つている。企劃部がどんなプロを編成するか必ずや、柳友諸氏の御期待に應え得ることを確信するものであるが、本稿を〆切るまでに決つているのは、

十二月三日の第一土曜日

と云うことだけである。この日だけはあけておいていただきたい。

社用、其他で御上阪の地方柳人も、この日を日程に組込まれたい。

藝者とは見へない夏のワンピース　白星
ワンピースぬがせてやるも新世帶　同
前身はカーテンだつたワンピース　同
五月とハッキリわかるワンピース　好郎
病床の窓を打つてる蟬の声　東夢
木登りの出來る子蟬を分けてやり　高志
一言も言へず歩いただけの仲　東夢
たのもしい人だと無口言はれたり　白星
無口者女房にだけはちとしやべり　高志
無口から寸鉄人を刺す言葉　白星
誰に似て無口なのかと母こぼし　高志
首切りに残つた奴は無口なり　登志
默然と請求書に相対す　好郎

川柳雑誌布哇支部　**ウイロー社句會**（ハワイ）

八月　吉川麗花麗報

椅子

女客見えて社長は椅子を立ち　河舟
正論は椅子を賭けても云ひつのり　草一郎
椅子一つ譲るにあゝのこうたのと　麗花麗
行く先で椅子が待つてる氣安さよ　蟹波
社長席せめて椅子なとかけたるか　快夢起
口論の二人は椅子を蹴つて立ち　泉水
腰弁の悲しさ今日も固い椅子　友郎
あこがれた椅子へどうやら辿りつき　野渉
就職へ粗末な椅子もたのしくて　同

先代が遺した椅子の重いこと　一牛
血眼になつて伜ふ椅子一つ　東田楼
籐椅子のもちへ三越ほめる妻　曉舟
正直に勤めた椅子の憐れなり　亭駒
いゝ月へありたけの椅子出してゐる　同
縁り合ふ有爲轉変を椅子で知り　宗郎

川雑　**岡山支部句會**（岡山縣）

吉備團子句集発行記念

八月十三日　於禁酒会館

大森風來子報

吉備團子・裸・半ズボン・街路樹・花火

吉備團子旅行鞄の底に買い　北路
吉備團子試食と云うて一つ出し　笑泉
肌合に息あるような吉備團子　茶々
すそ分けに一つもらつた吉備團子　久米女
岡山の話がすぐに吉備團子　聰夢
岡山に寄つた印の吉備團子　七面山
吉備團子二重底とは知らなんだ　瀧年
吉備團子椅子へ二つ突きさゝれ　風來子
吉備團子五日重べのように喰べ　弓削平
吉備團子ほのぼのとする味を持ち　喜宝亭
新妻の顔が笑つた吉備團子　久米雄
父ちやんが案外細い裸なり　同
風吹けばすだれの奥に裸あり　北路
ごまかしのきかぬ裸がうつされる　通常
半ずぼん見合の席には知らずに來　北路
足の毛が頭に欲しい半ずぼん　久米女
半ずぼん唯物論を説く教師　北路
墓參ゐり半ずぼんで來ての足らず　北星
半ずぼんのそり〳〵とあるかれず　七面山
街路樹へ二人の肩がふれつゞけ　久米雄
街路樹に夜明けの雨を教えられ　鉄宇
キャンデー屋花火の方は見てゐない　弓削平
密会を花火はつきり見せてくれ　瀧年
花火消え二人とも話すことがない　北路

川雑　**宇部・下關支部句會**

縣下同好柳人追善句会

六月四日　於福王禪寺

國弘半休報

追憶・残金・踊る・燈籠

七十年の追憶生きる事にのみなやんだ　米三
女丈夫は寫眞の前に妻で居る　素人
一文も残さず持つて出る仕入　半休
残高が赤字にならぬいゝ生活　素人
釣銭はいらぬとニユーム振向かず　米三
残金がとぼしく夕餉一人とる　九呂平
残金を素直に戻す子の旅行　同
氣がつけばコツケル貨ばかりを持ちあぐん　粗影
皆んな踊つたというに俺は寝ていた　半休
制服を鞄の底にして踊り　粗影
石燈籠今夜の客をさげすみぬ　同
燈籠が邪魔になつてる蟬袋　半休
戰争も平和も知つて馬は老け　素人

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）

八月二十七日　於葉留路居

弘津柳慶報

夕涼・嘘から出た眞・空箱

夕涼寝るには惜しい風があり　芳泉
若夫婦だけ残された涼台　愛鳩

夕涼税の話に落ちて行き　可笑
夕涼やいとのあとを見つけたり　葉留路
夕涼今日も將棋は取りまかれ　同
夕涼噂の人が前を行き　柳慶
新世帶膳そのまゝに夕涼　芳郎
夕涼他人のうちわもちかへり　松本
縁起でもない冗談が的中し　芳泉
眞に受けて來られ今更ことわれや　愛鳩
言ひ拔けもつきて女はなくばかり　同
氣休めのそれから日々に全快し　同
嘘ばかり吐きつゝ心まけてくる　柳慶
空箱を踏み合にする智慧がつき　同
空箱も並べ兎に角開店し　同
空箱を借りて手品の二つ三つ　芳泉
いゝ匂ひのする空箱の字が読めや　同
空箱に手巻を詰めて街へ出る　芳郎
空箱の値段女房を驚かし　可笑
空箱を集めルンペン樣の家　葉留路
空箱をみせて一本催促し　愛鳩

川雜　**大牟田支部句會**

九月二十日　於三池染料保安課

富田一葉報

予算・忍び足・PTA・片思ひ・隣

薄給の予算が狂ふ泊り客　水泡
新婚の予算賣家頼り過ぎ　トンボ
やりくりがつかぬ予算も立てられや　亀丁
妻の見榮予算を少うし変へたがり　凡生
五千億の予算へ俺の税もあり　修
宮城の予算閣議で削られる　波人
新婚のたはむれ忍び足も良し　凡生
会議中小使忍びの足で來る　扇波
PTA先ず学校の意見聞く　水泡
PTA師の生活も考慮する　抱逸
女教師の酌は断るPTA　波人
PTA困つた色で座が白らけ　近
PTA夕餉の仕度氣にかゝり　一葉
先生の態度がPTAでもめ　薫風
その先は言へず結局片思ひ　凡生
片思ひ詩人この頃詩を書かず　波人
秋風に垢を拂つた脱穀機　十四之
秋風に富士はたなびく雲をかへ　波人
秋風へそろ〳〵荷が屆き　凡生
お隣も同じ足りない事が知れ　水泡
お隣を女尊男卑の例にひき　トンボ
まな板の音お隣は起きてゐる　薫風

川雜　**篠山支部句會**（兵庫縣）

九月十一日　於篠山配電局

潤足・嘘・杖

父兄会吾が子の出來に潤足し　指月
レイ飾る水の使節の潤足し　無聖

—動　靜—

▼本社十月例会は一日午後六時から大宝文化会館三階で開催した▼川雜美作支部創立句会が十月九日正午から弓削町小学校講堂で開催された▼川雜嬬路支部創立句会が西町之坪の樹甫居で開催された▼大阪通信病院川柳会は十月十五日午後二時から図書室で開催▼南区医師会文化部川柳会は十月十八日午後七時、大宝文化会館二階で開催▼南海鉄道川柳会は十月十九日午後五時半、同社四階会議室で開催▼川雜大阪南支部（川雜阿倍野支部発展的解消によつて創立）は十月廿二日午後六時から王子神社で開催▼男前製造所小集（大阪）は十月三日午後六時、南柳居で開催、以上何れも路郎主幹出席▼川雜下関支部句会は十月九日、半休居で開催された。猶同支部では第三回下関駅頭文化板川柳展を十月十二日から十八日まで開く。▼千石荘川柳会では「体温」が復活、雜吟は路郎主幹の選。千原庸司氏のあとをうけて小山梵鐘、松原周太郎氏等が、努力している、発展を祈る。▼六文銭川柳句会（上田市）が九月廿三日に田口碧浪居で催された▼第三回リクリエーション川柳大会（今治市）が十月九日、今治市廳控室で開催され盛会だつた▼六文銭例会（上田市）は十月十二日春風居で開催▼小林茗八慰問川柳を凡々、月南両氏が主催で募集されることとなつた、ハガキ毛筆で一句〆切十一月十五日奈良縣生駒郡平群村椿原川柳むつみ社宛▼蹠本文化祭川柳大会が鳴風、濤明両氏指導の下に、十月十六日正午から代繼神社で開催▼川雜大牟田支部では九月廿日に川柳忌を催し盛会だつた由▼内子短詩門（愛媛縣）では九月廿三日夜川柳忌を営まれた▼内田雄二氏は大阪市社会教育課文化係長から今回上本町九丁目の大阪市立文化会館長に栄轉された。▼早川聰松氏は（尼崎市）は慢性の胃病再発心臓も弱り夜具のあげおろしにも鼓動が激しいので外出も困難、從つて句会も出來兼ねていられる由▼石井大阪日日新聞社長（大阪）から弊誌が大阪の中央部へ連絡所を設けたのを祝され「町中へ出て來たのだと両手あげ」の句を寄せられた▼米沢曉明氏（愛媛縣）は大洲町から一里の南久米小学校に轉勤された▼西村佳唱氏（函館）は十月中旬、奈良縣の深井凡々居を訪問された▼大谷五花村氏（横浜市）は山形の管野松風氏の來訪をうけられ同氏同伴、東京の井上信子女史を訪問された由▼塚越正光氏（東京都）は全國浴場新聞社の社用で十月には四國中國に出張されるとのこと▼三條東洋樹氏は十月八日、川雜なんば連絡所へ來訪されたが、生憎主幹が旅行中だつた。

高級化粧品・器具・容器科学的！
マキンの……
黒硝子
大阪市南大阪区長堀西通一丁目四四
山銀株式會社
電話櫓川四四四七番

延長十二回敗けて選手の技をほめ　凡志
豊作で潤足そうに親爺死に　句士
初任給潤足ですと言われされ　齊花
殘りもので潤足してる母たうと　無鬼
あの女俺にも同じ事を言ひ　指月
雄弁に一つ二つの嘘もあり　無聖
嘘でない管の事迄嘘となり　齊花
重役の前できれいな嘘が知れ　凡志
うそだがスラ〳〵言へる子を憎み　同
小心の小さな嘘に氣を痛め　齊花
嘘ばかり言ふて豪華な葬し向き　鬼
嘘だとは思へど言ふが儘になり　同
ステッキの樣に添うて女秘書　無聖
洋傘を杖の代りに持つて行き　指月
杖にすがり原爆の地に今日も葬　尋四
盲人の杖のさばきへそつとよけ　凡志
切符買ふ手はステッキを腕にかけ　齊花
大峯の杖にすがつたとは言はず　無鬼

さつき川柳忌句會（滋賀縣）

九月七日　於忠一居

寫眞・自轉車

婚礼の写眞喧嘩はしない顔　不倒
寄り添うた写眞のおきこしはひとつ　美秋
もう少し寄れと写眞屋氣をきかし　同
写眞帖母が眼鏡で子をさがし　斗志
アルバムを見せて話の座をつなぎ　敬二
写眞屋は親も及ばぬあやし方　正次

写眞にも香が匂ひそう厚化粧　春巣
男乘りズボンはく娘のはばからず　不倒
自轉車に乘せた事からうわされ　同
自轉車のリンが無力な繁華街　斗志
バンクしたなどと道草うそをつき　秋美
紙芝居共産党の資金なり　郁夫
ほろ酔ひで眞似したくなる紙芝居　和夫
紙芝居今日声嗣に叱られる　春巣

交通局川柳會（大阪市）

八月五日　於本局文化殿

冨岡淡舟報

アロハシヤツ・口髭・幽霊・船遊び・燈籠

刺青の腕をまくつたアロハシヤツ　胡蝶
アロハシヤツ街頭写眞向けられる　兎子
アロハシヤツ母間ひ返し〳〵　翠芳
口髭も想ひ出となる一週忌　淡舟
アゝそうかアレは課長の口髭だ　翠芳
幽霊が立膝してる樂屋裏　兎子
遊覽船蔦ゆう〳〵輪をえがき　同
老ひらくの恋は涼しい船遊び　淡舟
船遊び母親の目が離れない　雨
酒にすし三味線も行く船遊び　雨
船遊び静かな方へ漕いで行き　月
夕涼み燈籠の灯の消えるまで　翠芳
石燈籠名士と共に撮される　孫
胡蝶　拙

編輯室にて

▼本紙の紙質が八月号以來よくなつたので好評嘖々である。それに発行が早くなつたことも好評、内容の充実したのも好評、編輯があざやかだとこれ又好評、全く好評づくめなので編輯部の張切り方は一ト通りでない。みんなわかつていて呉れると思うと力の入れ方が違う。ありがたいことである。▼本号の表紙「ライターとラッキーストライク」は岩田清画伯の揮毫。▼句評「東西南北」は山雨楼、喜由、白星、野介の四氏を煩はしたものである。この句評は例によつて山雨楼氏が世話役となつて通信で行つたものである。今回からこの句評に大阪からも一名参加して貰つた。大阪も参加した方がいゝと云う亜鈍氏の意見を実行したのである。▼戸田古方氏は「大衆の藝術」を発表▼宇井無愁氏は「荒い鼻いき」を▼丸山弓削平氏は「川柳普及の実際」の続稿を。▼静岡忠八氏は「川柳よ時代と共に」を執筆された▼記事がふくそうしたので拙稿は「文化の日に」の一文にとどめた▼大阪市主催大阪各柳社協賛の市民川柳大会が市民文化祭の一行事として十一月十三日正午から大丸水曜クラブに於て開催されることとなつたが準備委員会のプロ編成が、本稿締切りまでに確定しなかつたので発表することが出來なかつた▼私は十月八日に発つて岡山縣弓削町で開催された美作支部創立川柳大会と十一日の姫路支部創立句会に出席した。山峡の箱庭のやうな弓削の町に、雨天にもかかわらず六十三名と云う多数が集つたことは大きなよろこびであつた。弓削の町を川柳化せうと云う旺んな意氣が駅から街へと貼り出されたポスターや道標にまであふれていた。姫路支部は数に於ては弓削に及ばなかつたが、和やかな空氣の漂うていたことは弓削にも劣らないものがあつた。いつまでもこの創立の日の心をだいて、精進しつづけてほしいものである▼旅から戻つた私はあまりの忙しさに、どうも寝込んだが、句会は殆んど毎晩あるし、なんばの連絡所へは出勤しなければならないし、新聞の連載原稿は切れるし、ジッと寝込んでられぬので、逓信病院の若林草右博士を煩はしたら、きかんしかたるだが血圧は高くないとの診断、酒と煙草と入浴は当分遠慮した方がいゝでせうとのことであつた。しかし、酒と煙草はおそるおそる少量を自らゆるし、入浴だけ遠慮することにした。連絡所への出勤は二日だけ見合せたが、句会はどの句会へも欠席しなかつた。句会に出席している私は病人ではないが、床に入ると同時に、腹がデングリ返えるほど咳が出て苦しみ抜く、それでも約束の句会だけ休まないことにしている。▼編輯部ではもう、新年号への企劃で忙しくしているまだ締切まで日があるなどと考えずに早く投句の事。

▼廣告部でも恒例によつて年賀廣告を募つているので御支援御協力が願いたい。（路）

最短時間で結ぶ
大阪―名古屋
3時間25分
特急
毎日3往復
座席指定制一
特急料金 ¥50
上本町発 7.40 12.40 16.40
名古屋発 8.05 13.05 17.05
近畿日本鉄道

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
課目
謡道（小原流・宋生流）
茶道（表千家流・宗偏流・花月庵流）
洋裁・書道・日本畫
箏曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謡曲
服飾デザイン
詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ
松坂屋
大阪日本橋
電南一一七一番

シマズに ヨクキク
大學目藥
結膜炎
トラホーム
つかれ目
15cc 正價¥30
天堂製藥

Made in Occupied Japan

募集

課題吟募集

夜汽車（十句）北川春巣選（十二月五日締切）

母親（十句）奥村丹路選（一月五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第四卷 第十号
一冊 金三〇円（送料三円）
半ケ年概算 金一九八円
一ケ年概算 金三九六円
（戦轉禁）
昭和廿四年十月廿五日印刷
昭和廿四年十一月一日発行
大阪市住吉區苅代西九丁目二五番地
麻生幸二郎
大阪市住吉區苅代西五丁目二五番地
麻生路郎
発行所 川柳雑誌社
振替口座 大阪 七五〇五〇